



連載

常陸時代の佐竹氏  
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」  
の佐竹氏家紋

【第2回】

## 奥州にこだわった始祖・源義光

## 新羅善神堂の神前で元服

JR東海道本線で京都駅手前の山科駅まで行き、JR湖西線に乗り換え、琵琶湖西岸の滋賀県大津市の大津京駅に向かう。ここで降りて京阪石山坂本線の最寄り駅まで歩き、大津市役所前駅で降りる。目指す三井寺の新羅善神堂は、大津市役所と道一本隔てた山際にある。佐竹氏の始祖である源義光を連載で最初に取り上げるため去る4月25日、現地を訪れた。三井寺の正式名は長等山園城寺という。小雨まじりの中、国宝・新羅善神堂は威厳を漂わせ、ひっそりと建っていた。

江戸時代、久保田藩（秋田県）は佐竹氏歴代の事蹟をまとめた『佐竹家譜』を編さんした。最初に佐竹氏始祖となる源義光の事を書いている。「天喜三年（1055）、陸奥国鎮守府に生る。清和帝第六の王子貞純親王の孫將軍源頼義の第三子にして、義家、義綱の同母弟なり」。続けて「康平六年（1063）3月18日、父頼義と同く新羅大明神に詣で、神前に於て首服を加え、新羅三郎義実と称す。後義光と改む」とある。首服は元服のこと。義光は新羅善神堂の神前で成人し、以後、自らの活路を求め波乱の道を歩むことになる。

## 後三年合戦に駆け付ける

義光が歴史に登場する最初の出来事は、奥州で起きた「後三年合戦」である。永保3年（1083）、奥州に勢力を張っていた清原氏の当主、真衡は養子婿の婚礼を行った。その時、一族の長老が真衡の無礼な態度に怒り、出羽に帰国。これに腹を立てた真衡が兵を挙げた事が同合戦の発端とされる。これに同年、陸奥守として京から下向してきた源義家が清原一族の内乱に介入。清原一族は敵・味方に分かれて戦った。その決戦の場が秋田県横手市にあった金沢柵である。義光はこの柵の戦いから登場する。

同合戦を伝える『奥州後三年記』（「群書類従巻第三百六十九」）はこう述べている。「將軍の舍弟左兵衛尉義光。おもはざるに陣に來將軍にむかひていわく。ほのかに戦のよしをうけたまはりて。院に暇を申侍りていはく。義家夷せめられてあぶなく侍るよしうけ給る。身の暇を給ふてまかりくだりて死生を見候はんと申し上るを。いとま・たまはらざ

りしかば。兵衛尉を辞し申。まかりくだりてなんはばるといふ」。義家はこれに感涙し、義光を副將軍とし、味方の清原清衡らと敵の清原家衡・武衡が籠もる金沢柵を包囲、兵糧攻めに入った。

苦境に陥った武衡は義光に講和を要請する文を送ってきた。しかし、義家は拒否。武衡はなおも降伏をしたいので義光に金沢柵に来て欲しいと伝える。これに対し義家は義光を激しく非難、断固として許さなかった。樋口知志氏は『前九年・後三年合戦と兵の時代』（平成28年、吉川弘文館発行）の中で「義家と義光の間に明らかな意見の相違がみられる」とし、「義光は武衡の降伏を受け入れるかたちで戦いを終結させる方が自分たち一族の孤立・没落を回避するためにも得策であると考えていたようである」とみる。義光はこの合戦の実態を見抜いていたのかもしれない。

## 奥州菊田荘の入手

後三年合戦は寛治元年（1087）、金沢柵の落城、清原家衡・武衡等の斬首で終結した。義家は「賊徒」家衡・武衡「追討」の旨を朝廷に報じたが、翌年（1088）、朝廷は義家の合戦を「私戦」とみなし、陸奥守を罷免。後任に藤原基家が就いた。私戦とみなされたことで義家郎等や傘下の武将に恩賞はなかった。義光もしかりである。終戦から6年後の寛治7年（1093）、義光は白河院の乳母兄弟にあたる藤原顕季と土地の領有をめぐる相論（裁判）を起こした。顕季からみれば理不尽な事であったが、白河院は顕季の身を案じ、義光の言い分を認めた。

その場面が『古事談』（「新日本古典文学大系41」）に載っている。白河院「つらつら此の事を案ずるに汝は件の荘一所無しといえども全く事かくべからず。彼はただ一所懸命の由、之をきこしめず。道理に任せて裁許せしむれば、子細をわきまえずして、武士もしくは腹黒などや出来せんずらん、と書いて猶予するなり。ただ、件の所を避りてよかしと思うなり」。義光は武士。腹黒いことをするかもしれない。だからあの土地は義光に譲ってやれ、と論している。

相論の地は佐竹系図の一つ『御當家系図』（「続群書類従巻第二百二十」）義光の注書きに「六条修理大夫顕季卿。在由緒。東国菊田荘義光被進也」とあることから陸奥国菊田荘と判明した。菊田荘は福島県

いわき市付近にあった。義光は当時の最高権力者の側近と相論を起こしてまでなぜ、奥州に土地を入手したかったのか。「一所懸命」にさせる背景に何があったのか。穀物や馬を育てる土地ならほかにあるだろう。義光は奥州から出る金の産出地を手に入れたかったのではないだろうか。

## 常陸国合戦の背景

後三年合戦の舞台となった奥州も従来の秩序が崩壊し、勝ち残った清原清衡につらなる一族による略奪事件も起こっていた。事件首謀者の追討のため朝廷は嘉保元年(1094)、義家の弟「源義綱を陸奥守として下向」(『前九年・後三年合戦と兵の時代』)させた。清衡は同年、義綱下向と入れ替わるように奥州を抜け出し、入京した。摂関家に貢物を贈りながら支援の人脈づくりに奔走していたようだ。「戦友」の義家や義光とも会っていたことだろう。

菊田荘を得た義光は歴史上、「常陸国合戦」と呼ばれる合戦を行っている。公家の日記『永昌記』(『増補史料大成』第八巻)の嘉承元年(1106)6月10日条に「常陸国合戦事、又春宮太夫、義光并平重幹等党、仰東国国司可召進之、義國令親父義家朝臣召進之」とある。朝廷が東国の国司に義光と平重幹を、また義家に息子の義国をそれぞれ召し連れて参れ、と命令を出した。

常陸国合戦は召喚命令が出た4、5年前頃から始まっていたようだ。義光は姻戚関係を結んだ常陸国の豪族、平重幹と戦っている。召喚命令の文面から相手は兄義家の子、義国のようだ。なぜ、義光はこの戦いを起こしたのか。通説によると、平重幹が義光に加勢を求め勢力拡大を狙った戦いとみられている。しかし、筆者は義光が奥州からでる金の権益を狙って仕掛けた戦いではないか、とみている。合戦場所も産金神が祀られる八溝山ろくの武茂地方(栃木県那珂川町周辺)ではなかった、と考えられる。

## 三井寺で死去

常陸国合戦は召喚命令が出た嘉承元年、源義家が亡くなったことで拍子抜けの状態となった。帰洛した義光は自らが元服した三井寺に籠った。刑部丞の役職も外された。そんななか、天仁2年(1109)、義家の子で河内源氏の棟梁、義忠が何者かに暗殺されるという事件が発生した。犯人探しの過程で義光の兄、義綱親子に嫌疑がかけられた。義綱討伐戦の渦中、義綱の子どもたちは相次いで自害。義綱も佐渡に流された後、自害。父頼義以来、河内源氏を支えてきた長兄義家、次兄義綱が相次いで世を去った。

義光はこの後、嫡男義業を常陸国から京へ呼び寄せた。河内源氏は混乱を極め、一族の衰退は明らかだった。義業の安泰を図るためか、義光は義業を文章生の道へ進ませた。学生から再スタートさせたのである。河内源氏への風当たりを避け、息子の身を守るための苦肉の策とも映る。義光自身は、平泉に都を築き、清原姓を改め藤原清衡となった「戦友」と共に摂政・関白への貢馬に余念がなかった。

義光が籠った三井寺はとにかく広い。金堂(本堂)がある中院、観音堂が建つ南院、守護神・新羅明神像を祀る新羅善神堂がある北院、周辺5カ寺で構成する別所の4エリアで成り立っている。義光の最後を『後拾遺往生傳』(『続群書類従巻第百九十七』)は次のように記す。「不怠念佛」、「吾明日不可過。故処分資財。兼告臨終行儀也」と。義業と覺義(出家した義光の子)の二人を呼び、財産の処分をし、臨終の儀を行った。『佐竹家譜』は大治2年(1127)10月、73歳で亡くなった、と記述している。

歴史ジャーナリスト  
茨城県郷土文化研究会会長  
富山 章一



国宝の新羅善神堂。源頼義の三男、義光はこの神前で元服したと伝えられている。現在の社殿は貞和三年(1347)、足利尊氏が再興した=滋賀県大津市

(筆者撮影)